

蠟に対する気温の影響があるので気温は $20 \pm 1^{\circ}\text{C}$ とし、蠟材の温度を $60 \sim 180^{\circ}\text{C}$ とした。

技法として蠟染用筆を使用し、使用布の下に濾紙がある新聞紙を敷き、筆に一定量の蠟を含ませ、一定の筆力で素早く書くことにした。蠟書した布はナフトール染料により濃色に染めその後ソーピングを行なった。

染後白色の程度の判定は光電比色計によって行なった。

3. 今白蠟について適温を考えると、 80°C 前後であろうと思われる。

B-2 藤纈染めの基礎研究

和洋女大 伊藤秀三郎
○我妻美奈子
東京芸大美術 志賀 和子

1. 古くより夾纈、纈纈及び藤纈があり、その三纈の中の一つである蠟染は、現在に於いて美術工芸品即ち室内装飾やその他のものとして広く用いられている。さて蠟の適温は「煙の出る位の温度」といわれ「勘」によってなされている。そのため技術を獲得するために長い熟練時間を要し、個人差も大である。そこで私共は初歩の人達は勿論のこと失敗なく、誰れにでも技術的に容易に防染出来る蠟材の温度についての探究にしぼった。

蠟染効果を左右する、最も基本的問題は、蠟材による染後白色の程度という点であるので、蠟材の種類及び温度を検討した。

2. 使用布は市販されている60番ブロード、蠟材はパラフィン、白蠟及び蜜蠟等で、染料はナフトール染料である。